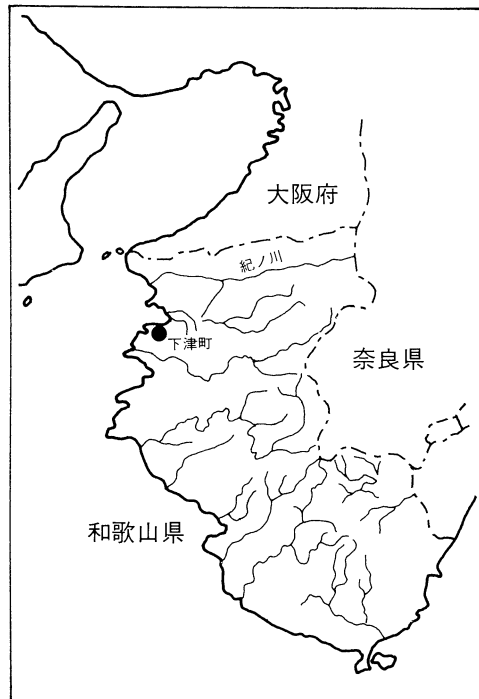


下津二中校庭遺跡

—下津第二中学校浄化槽改修に伴う下津二中校庭遺跡発掘調査概報—



平成4年10月31日

(財)和歌山県文化財センター

例 言

1. 本書は下津第二中学校浄化槽改修工事に伴う下津二中校庭遺跡発掘調査概報である。
2. 調査は下津町から委託を受け、和歌山県文化財課の指導のもと、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
3. 本調査は財団法人和歌山県文化財センター技師佐伯和也が担当した。
4. 本書の本文と実測図の遺物番号は一致するが、遺物写真図版の番号は一致しない。
5. 遺物実測図はすべて1/4で、遺物写真図版は任意の大きさに収録した。
6. 本書の編集については佐伯があたった。

目 次

1. はじめに	1
2. 層位と遺構	2
3. 遺 物	2
4. まとめ	3

図・図版目次

第一図 周辺の遺跡	1
第二図 調査位置図	2
第三図 遺構全体図	3
第四図 遺物実測図	4
図版 1 調査地遠景・野井戸跡	5
図版 2 南北土層・完掘状況	6
図版 3 遺 物	7

1. はじめに

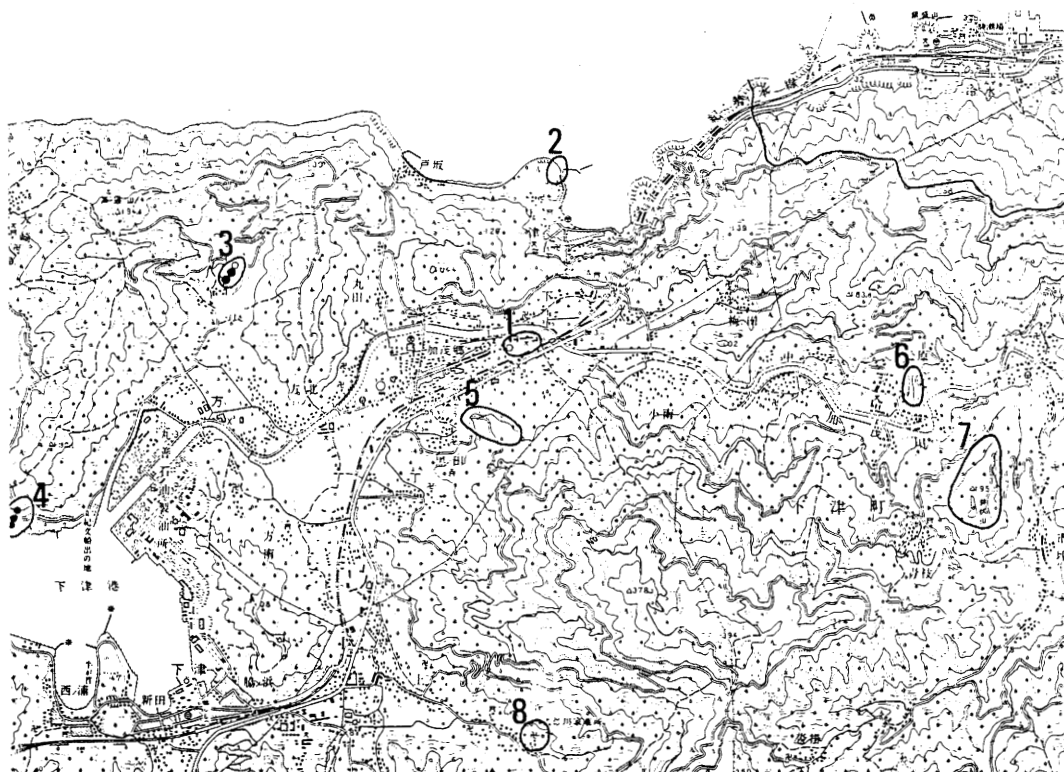
賀茂川下流の沖積平野に広がるこの遺跡は、下津第二中学校を中心として、縄文時代から中・近世に至るまで連綿と続く複合遺跡として周知されている。この遺跡は過去四回下遺跡として発掘調査が実施されているが、いずれも下津第二中学校校庭内である。今回の調査もまた、校庭内の浄化槽改修工事に伴うもので同じく校庭内の調査である。

調査は浄化槽改修予定地である標高約6.3mの現駐車場約115㎡を対象にした。現況は厚さ約15cmのコンクリートで覆われ、これを重機により削巖し、表土を排土して後は人力で掘りすすんだ。

調査地を含む下遺跡全域は比較的低位にあり、賀茂川の底とほとんどレベル的にも変わらず、堤防ができるまではおそらく賀茂川の流水域の一部と考えられる地点である。

2. 層位と遺構

層位は現地表面から約80cm下までは現在の人為的な堆積土である。それより下位は調査地の北を東西に流れる賀茂川の旧河道である。これの堆積土は砂層と玉砂利層である。この堆積土は基本的に四層に分層することができ、上層から、第一層は褐色砂層、第二層は小砂利層、第三層は茶褐色微砂層、第四層は砂利層である。これらの層を1.2m掘り下げた地点で堆積状態が軟弱な



第一図 周辺の遺跡

1. 下津二中校庭遺跡 2. 城山遺跡 3. 女良古墳群 4. 馬瀬古墳群
5. 黒田遺跡 6. 加茂郷城跡 7. 八伏山城跡 8. 長保寺坊跡

め調査を、断念した。つまり、地表面から約2mを掘り下げた。

また、調査地のほとんどが旧河道であるため、出土遺物と層位は相関関係が成り立たず、縄文時代晩期から近世に至るまでの土器が少量ではあるがバラバラで出土した。これらの土器はすべて摩耗しており明らかに上流から流されてきたものと考えられる。

遺構は、現在の堆積土を除去後、調査区の南西隅で石組の井戸を一基検出した。これは一般的に野井戸と呼ばれるもので、緑泥片岩で構築されている。残存高は1.2m、東西長約1.3m、南北長は調査区外にかかり1m以上を測る。これは跳木で水を汲み上げ用水路に水を誘導し、水田を潤すためのものである。ポンプが普及するまではこのような野井戸がこの辺りに点在していたと云われている。おそらく明治時代に造られ昭和初期まで使用していたと考えられる。

現地表面から1.5m下がった調査区の南側で褐色の弱粘質土をベースとする遺構面を検出した。しかし、これは調査区の南端をかすめたにすぎない。つまり、先人たちの生活面と旧加茂川の界を検出したと云える。この面は出土遺物の瓦器、土師器などから鎌倉時代の加茂川の南岸の一部分と考えられる。

3. 遺 物

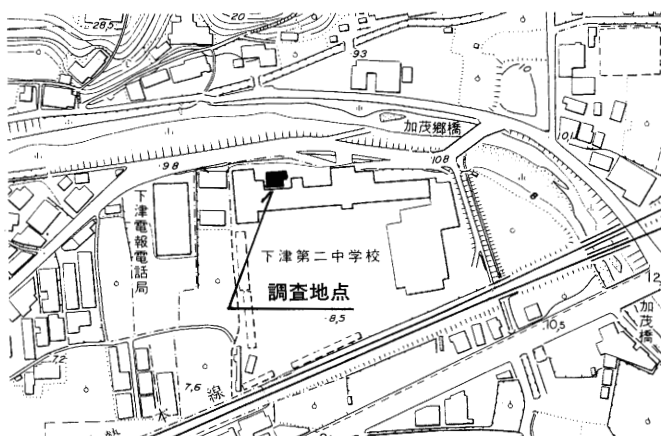
出土遺物の殆どは旧加茂川の堆積層からで、縄文時代晩期から江戸時代までの土器が少量ではあるが出土した。これらはいずれも細片で角に丸みを帯び、東から流されてきたものと考えられる。

近代整地土出土遺物（黄褐色土）（第四図）

(1)は近世の備前焼のすり鉢と思われ、全体に赤茶色を呈する。胎土には細かい砂粒が少量入る。すり目の幅は1mm、破片であるので単位は不明である。(2)は縄文時代晩期の鉢である。チョコレート色を呈し、胎土には角閃石が入る。口唇部の下方には刻目の凸帯を有する。(3)は伊万里焼の皿で、見込には五弁花、底部外面には渦福が施されている。

堆積土（小砂利混りの茶褐色土）

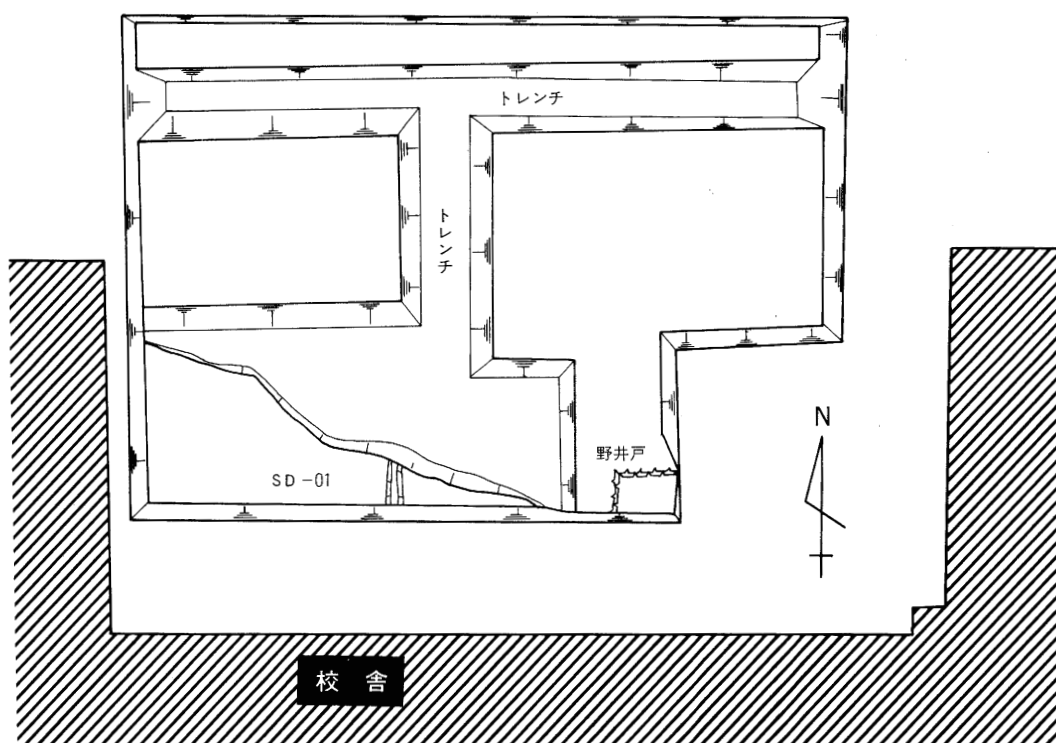
(4)は須恵器の杯身である。(5)も須恵器の壺の口縁部である。(6)は弥生土器の頸部である。くびれ部を界に上部に凹線文、下部に廉縄文を巡らしている。



第二図 調査位置図

堆積土（暗褐色粘質土）

土師質鍋の口縁部(7)は丹念なナデ調整が施され、胎土は細かい砂粒が多量に入る。(8)も土師質鍋の口縁部である。外面全体に煤が付着する。(9)は瓦器碗の底部である。器面はほとんど摩耗し、高台は低く、断面三角形を呈する。須恵器の杯身(10)は「ハ」の字状に開く高台を底部端に付している。



第三図 遺構平面図

(11)は須恵器の壺の口縁部と思われるもので、端部直下に断面三角形の凸帯、さらにわずかながら波状文が認められる。(12)~(14)は弥生時代後期の壺の底部である。(12)と(13)の内面にはハケ状工具による掻き目が見られる。また(12)の外面はほとんどが黒斑部分である。胎土は(12)~(14)全てに3~5mmの片岩粒が認められる。

堆積土（礫混りの褐色土）

(15)は土師器の皿である。口縁部はきついナデを施している。(16)は瀬戸美濃の天目茶碗で、暗茶褐色の釉が施釉されている。須恵器の坏蓋(17)は宝珠つまみの付くタイプのものである。(18)は小振りの土垂である。

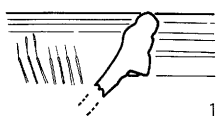
堆積土（明茶色微砂層）

(19)は須恵器の杯身である。「ハ」の字に開く高台が付く。(20)は高坏の坏部である。色調は明茶色を呈し、口縁端部はやや外方に開き、内外面はハケ目調整を施す。(21)は白磁の碗の底部である。内面には半透明の乳白色の釉がかかり、見込には重ね積みの痕跡がある。

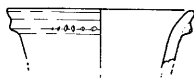
ま と め

今回の下遺跡における調査部分のほとんどは、旧賀茂川の河道にかかり、発掘作業の大半がトレンチ調査となった。しかし、本調査における最良の成果は、中世の生活面の北端の一部を検出したことにあると言える。

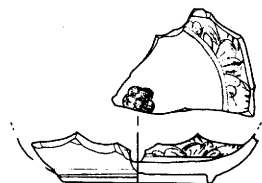
黄褐色土



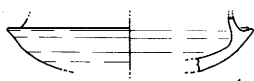
1



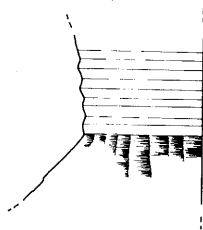
2



小砂利混りの茶褐色土



4



5

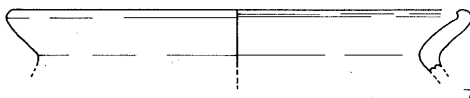


3

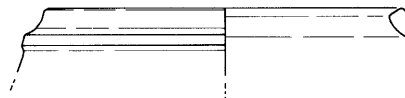


6

暗褐色粘質土



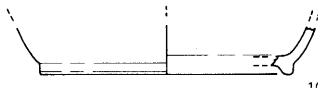
7



8



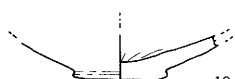
9



10



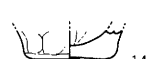
11



12



13



14

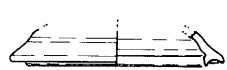
礫混りの褐色土



15



16

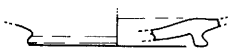


17



18

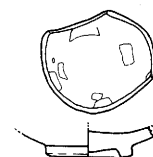
明茶色微砂層



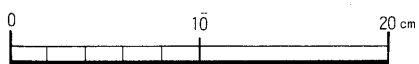
19



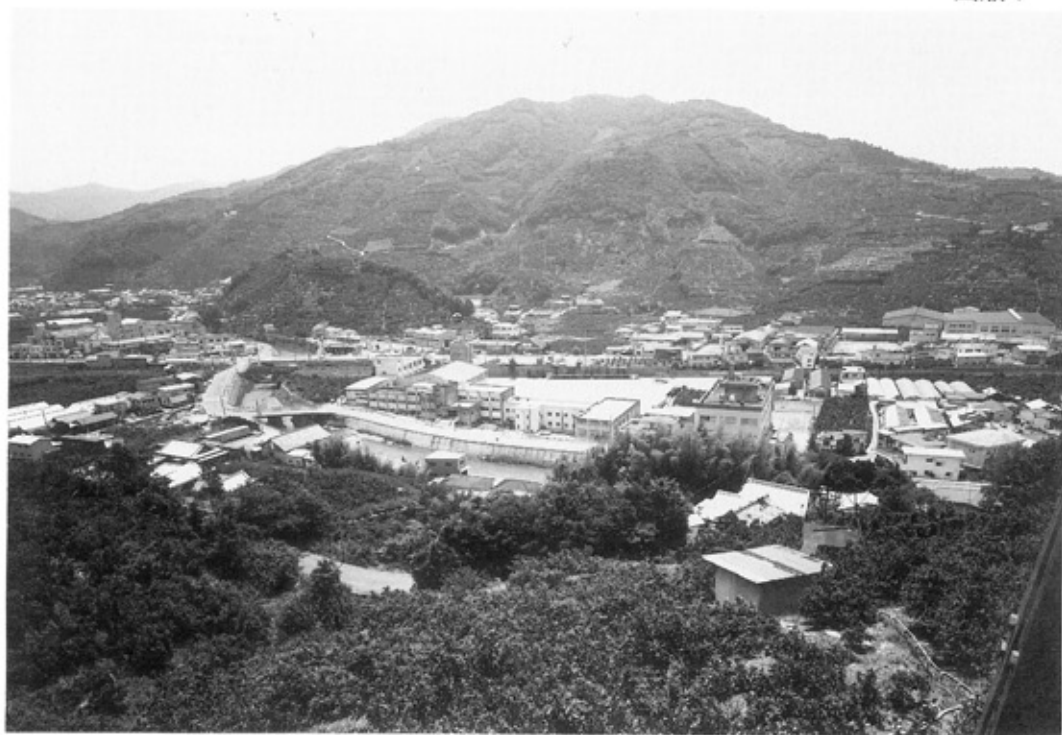
20



21



第四図 遺物実測図



調査地遠景（北から）



野井戸跡（南から）

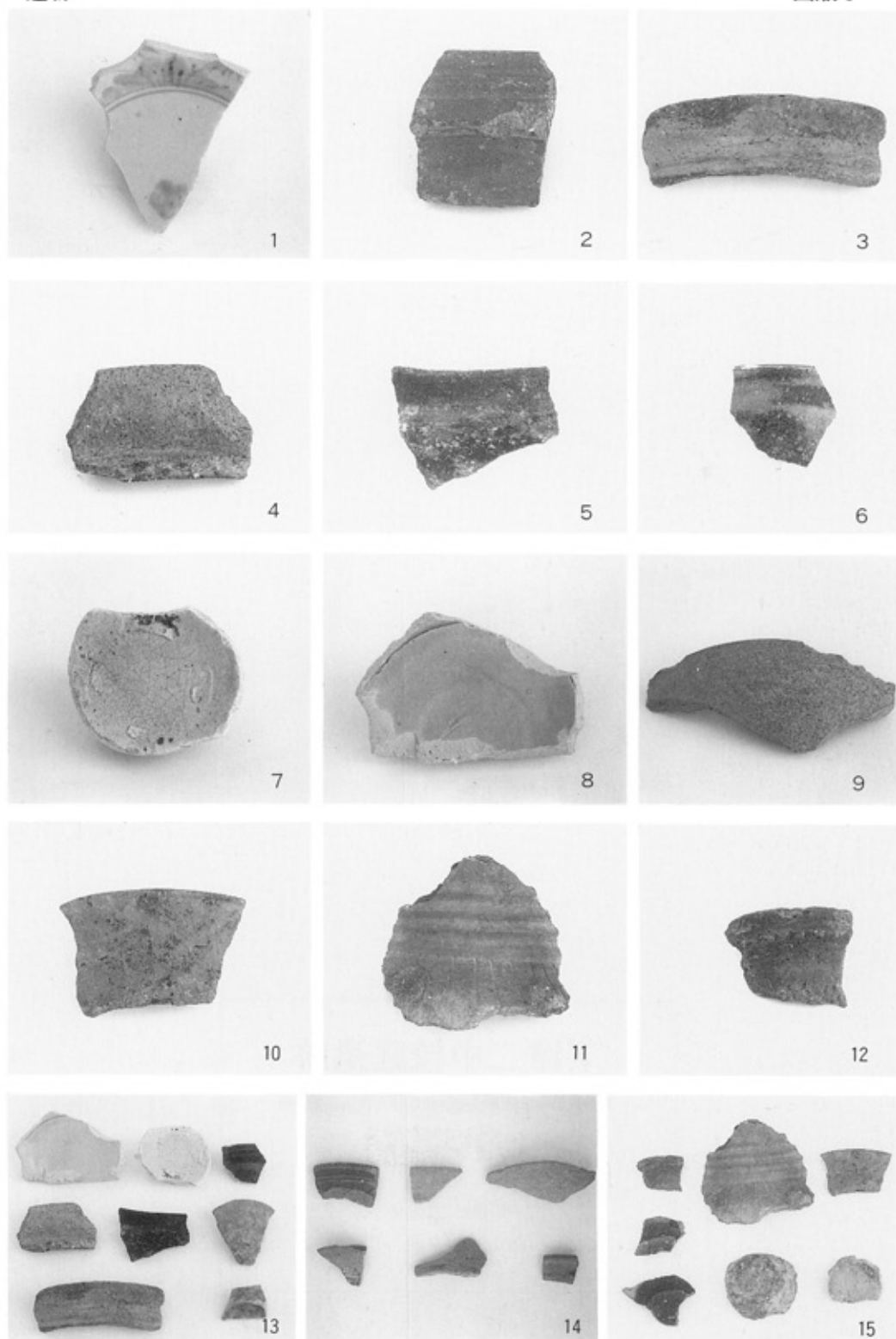
図版 2



南北土層（北から）



完掘状況（西から）



1. 伊万里焼 2. 近世備前すり鉢 3. 土師質鍋 4. 土師質鍋 5. 土師質羽釜
 6. 瀬戸美濃天目茶碗 7. 中国製白磁坏 8. 中国製白磁碗 9. 須恵器坏蓋 10. 弥生土器高坏(後期)
 11. 弥生土器(中期) 12. 弥生土器甕(前期) 13. 出土遺物(中世) 14. 出土遺物(古代) 15. 出土遺物(弥生時代)

下津二中校庭遺跡

— 下津第二中学校浄化槽改修に伴う発掘調査概報 —

平成 4 年 10 月

編集 (財)和歌山文化財センター
発行
印刷 (有)土屋総合印刷